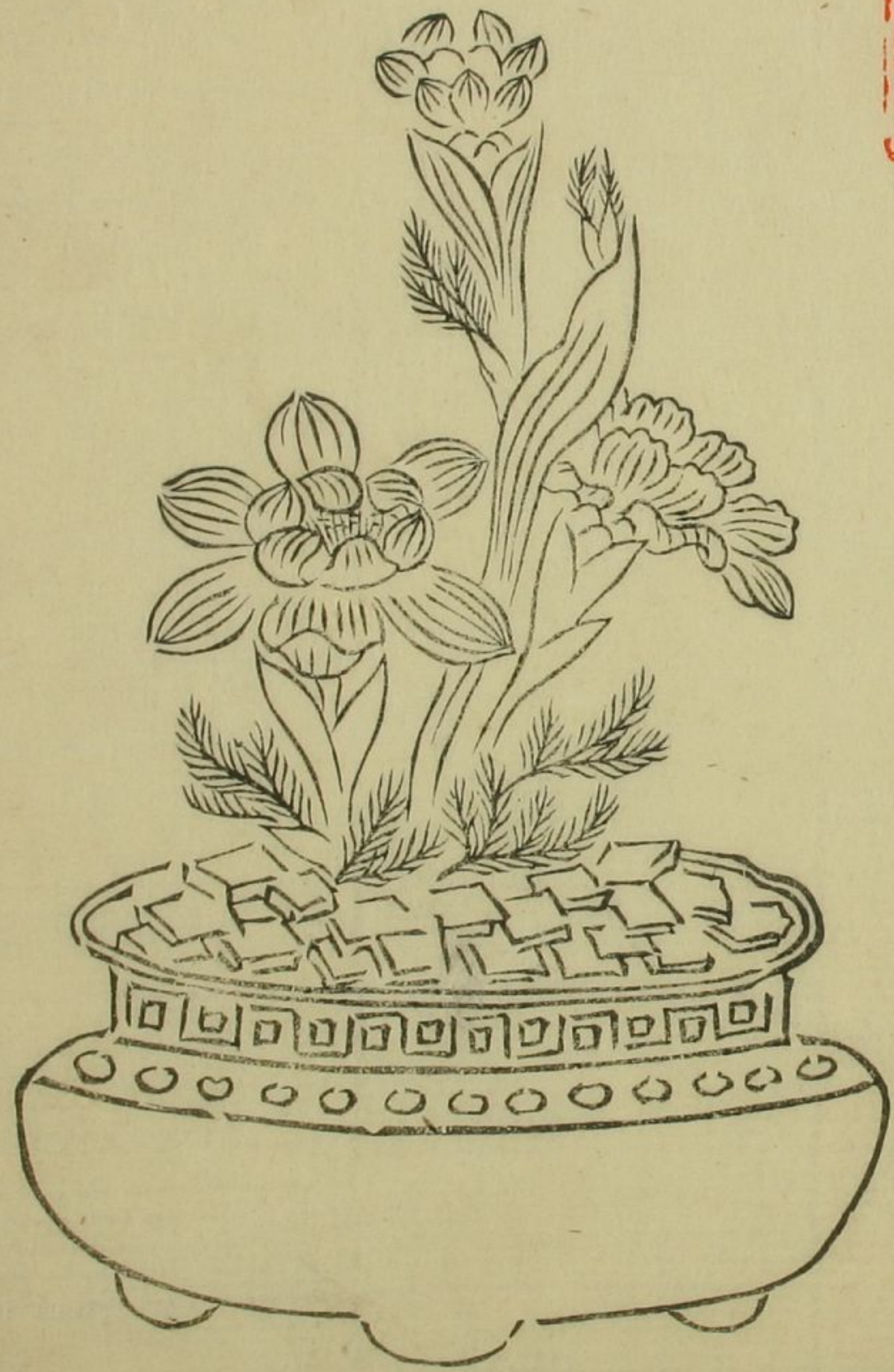




中村俊定文庫
文庫 18
385





芳月筆



むすしりもく上中目とくしり 郭云
ふはりて鶴おろくふくまきまひきまよふ
松子梅きりし事之まきの月子目と
ふらそせ雪見く後み可まきあまこり
むうとあまひ心ききあまきあまき
清けりま山甲雙ふし

草の戸もゆきゆき也みよのま 氷鏡
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき 木徳
こりゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき 氷室

案旦

麻くあまもふし 君々ま 木徳
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき 氷室
山ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき 氷鏡

○

宍子又一夜松ありし子代のま 氷室
しり山草のま白くゆき 氷谷
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき 氷鏡

○

四海ふる盤のまきまき 氷谷
弓も袋子屠蘇度章散 菊旦
川窟ハさき画の露ゆきゆき 氷鏡

○

菫菜ハさき家の不二よ子代のま 菊旦
松よりあまて 初日 桃鏡
版蛸牙入道号ハさきゆきゆき 氷鏡

○
山ハ人の髪よとらるやよのま
くさの髪よとらるやよのま
櫛さそまのりハ雲と化ぬらん
桃鏡
記聲
氷鏡

○
暎晴の鳥子ゆくり宮のま
志とあゆ〜か程のむの音
は〜〜 鹿が流のま〜似て
氷鏡
氷魚
記聲

○
天下を流も若木のむのま
〜まある〜ハニ十里の外
田と入に牛ハ影のゆ〜く〜て
氷鏡
鏡職
氷鏡

○
子業々困ハ〜〜 子代のま
鏡職
鏡職の取と〜した書ゆ
白鏡
氷鏡

○
空色の天〜〜より〜のま
螢明
螢明の〜の胸のま〜光る
氷鏡
氷鏡

○
不二ち〜〜ゆ〜やよのま
螢明
よ〜雲のま〜色井
賀鏡
百子も〜〜の鳥来て
氷鏡

○

不二の画ハミヨク信 宮のま 賀鏡

馬車御つくり地々 祓衣草 鏡波

黄檗ミヨク杯あらしみヨク 氷鏡

○

新ミヨク耳笑や河のむのま 鏡波

贊のりありのみあらし 雑鏡

風中ミヨク片々の馬と幸速く 氷鏡

○

松ミヨク旭の如くわたり子代のま 雑鏡

敷の子よめて移み練の子 氷人

所ミヨクあらし衣あぬ山もふ 氷鏡

○

東ミヨクあらしとあらしや四子のま 氷人

む一ミヨク将 魁 於 窓 芦鏡

手大根あらしとせハ凍けけ 氷鏡

○

世ミヨク一の吉日ハふらしみのま 芦鏡

欠ミヨクあらしと 袖ミヨク年玉 氷江

芥の味あらしとミヨク 氷鏡

○

志ミヨクあらしと江表 氷江

輪の山ミヨク 荻あらし 独活 鏡州

子水吐飛の台さもミヨク 氷鏡

○ 七重八重九重十重十一重十二重十三重十四重十五重十六重十七重十八重十九重二十重

鏡州

太田守尉若およ門礼の音

鏡山

○ 俣俣所々々津黄の路巾着て

氷鏡

○ 家く平松風色子げの音

鏡山

賞 初平賞ふ十之次

氷梅

○ 冬一野雪方の山きも笈もて

氷鏡

○ 雪平がら山の隅もあ一方の音

氷梅

あ〜〜の夢おは金衣も

湖鏡

○ 鏡と汲む〜の〜と〜〜〜りて

氷鏡

○ 風風もおる〜京も〜りの音

湖鏡

お下る〜園々山松の夢

氷柱

○ あり〜とあむあゆ板ハ橋りん

氷鏡

○ 松平の風〜〜宮の音

氷柱

鼓と〜〜り〜〜る音

寛路

○ 白魚と盆〜〜〜〜〜りて

氷鏡

○ 天運も〜〜〜り〜〜の音

寛路

あ音〜〜〜〜〜白〜〜〜〜〜

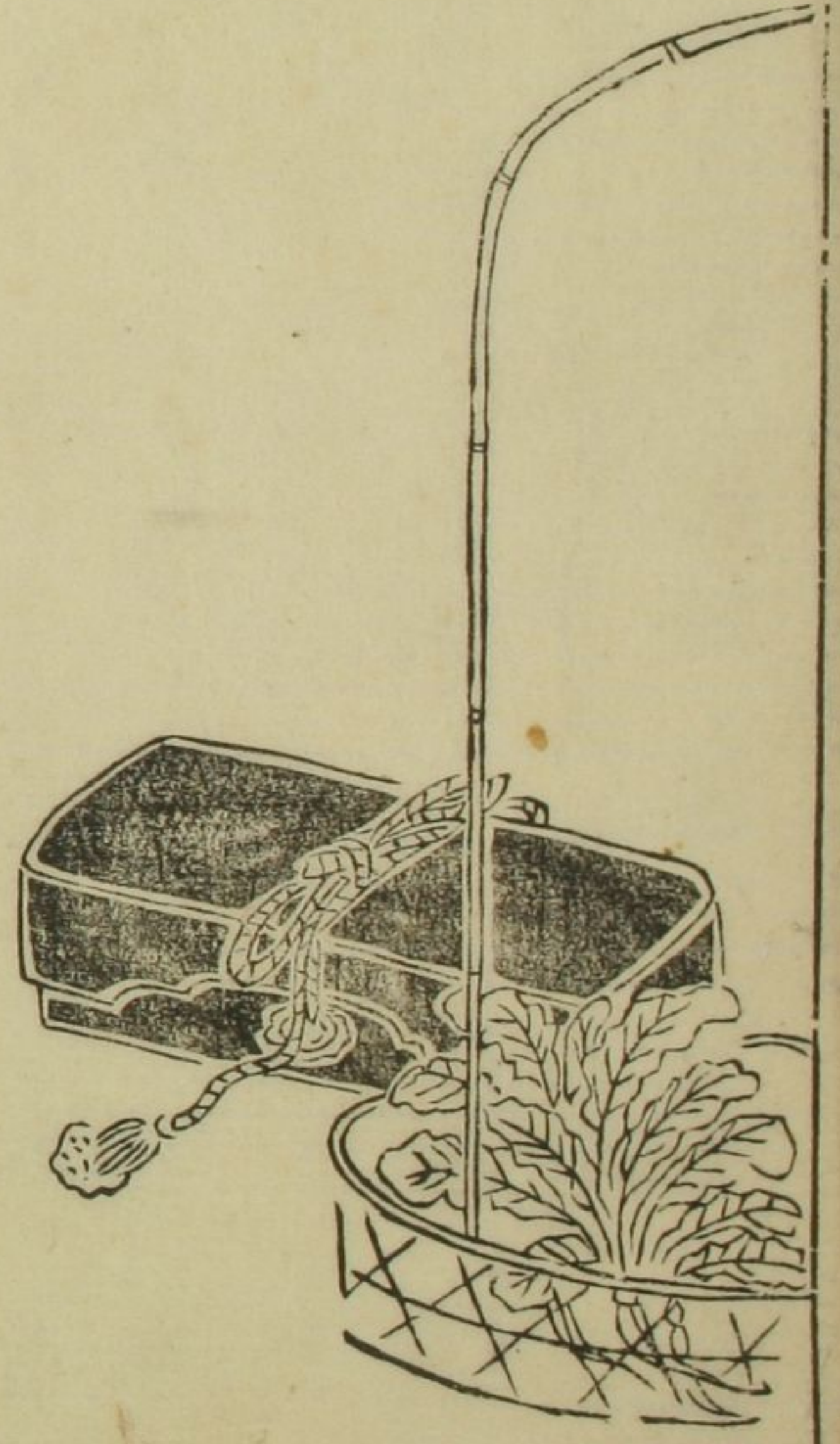
木徳

○ 魚〜〜〜子附の虎の渡りて

氷鏡

君ハ船長ハ月夜の玉のりハ
 リムハ心づか敷あふといふハ
 伊豆んとて田の信作との
 弟とみとてとむね年柳の
 と申すと申すやて

五月業



ふきや夢とくも拍子取 氷鏡
 人のきしりも凍しける 氷鏡
 吹風や依保雅の神をあらはて 氷人
 音のほろのさき 月 記聲
 あさなすのさかりと寄と お教族 曇明
 なるるく 約 氷鏡
 くの世の旭ハ音とり 氷鏡
 むつりやん 君の氷鏡 氷鏡
 子落るハおひらきとめ 氷鏡
 うみハ松葉 ふかハ氷 氷鏡

○ 終梅のふき紅はくりに糸色川 木徳
長刀あつて年一削るくさの夢 氷鏡
妻の夜中あそびりあつて月かて 記聲

○ くらげや遠山雫の和歌の友 氷室
の月とあつて日すあふれ梅 氷鏡
ゆきさかハ鶴と雁ふあつて 氷魚

○ 水清くくくく柳のちんちん 氷谷
筏田み波りり月田み是 氷鏡
あふれあふれぬのせきありて 鏡職

○ 雪了新く鞠子の羽日汁 菊旦
と流しつゝふれ梅苔も梅香 氷鏡
客人の小弓揚りまのたて 白鏡

○ 湯火のあつてはく 怪小桃鏡
秋一とくく柳くくめり 氷鏡
まぬの道りまのける 氷車 管明

○ あふれあふれ梅の糸色川 記聲
あつてあつてはくくくく 氷鏡
あつてあつてはくくくく 賀鏡

○

雪ハ四月も耳もこや。也 氷鳥
雪片の梅もよろよろあふ 氷鏡
あふあふあふあふあふあふあふ 氷鏡波

○

雪のちりりて曲に柳に 氷鏡
雪もあふあふあふあふあふあふ 氷鏡
陽光と雪後の入口のちりりて 氷鏡

○

雪新うき雪ははるる 氷鏡
雪ははるるあふあふあふあふあふ 氷鏡
雪もあふあふあふあふあふあふ 氷鏡
雪もあふあふあふあふあふあふ 氷鏡
雪もあふあふあふあふあふあふ 氷鏡
雪もあふあふあふあふあふあふ 氷鏡

○

雪のちりりて雪のちりりて 氷鏡
雪のちりりて雪のちりりて雪のちりりて 氷鏡
雪のちりりて雪のちりりて雪のちりりて 氷鏡
雪のちりりて雪のちりりて雪のちりりて 氷鏡
雪のちりりて雪のちりりて雪のちりりて 氷鏡
雪のちりりて雪のちりりて雪のちりりて 氷鏡

○

雪のちりりて雪のちりりて 氷鏡
雪のちりりて雪のちりりて雪のちりりて 氷鏡
雪のちりりて雪のちりりて雪のちりりて 氷鏡
雪のちりりて雪のちりりて雪のちりりて 氷鏡
雪のちりりて雪のちりりて雪のちりりて 氷鏡
雪のちりりて雪のちりりて雪のちりりて 氷鏡

○

雪のちりりて雪のちりりて 氷鏡
雪のちりりて雪のちりりて雪のちりりて 氷鏡
雪のちりりて雪のちりりて雪のちりりて 氷鏡
雪のちりりて雪のちりりて雪のちりりて 氷鏡
雪のちりりて雪のちりりて雪のちりりて 氷鏡
雪のちりりて雪のちりりて雪のちりりて 氷鏡

○ 山の井のあまのりりり鳴陸、那
新鏡
新きつあぬのま柳 氷鏡
梯系えかりあに妙り居片きて 鏡山

○ 有枝より神ひくおぬの蓋外 氷人
うけ系くひと葉宿柳沙後 氷鏡
貝何と色まのこあ〜〜〜らきて 氷梅

○ うのこやりり急神も武士も 芦鏡
凍下妙とや〜〜〜。 柳 氷鏡
序に芦めり行る〜〜角担〜 湖鏡

○ 水と遊みま〜〜と水の系柳 氷江
人言ま〜〜〜川〜〜〜 氷鏡
那よりあ〜〜〜りあ不海〜〜 氷柱

○ 晴天下鼻あく小田の陸外 鏡系
ま未ぶ〜〜もふん風足葉 氷鏡
まも〜〜やん不還石あ〜〜れて 寛法

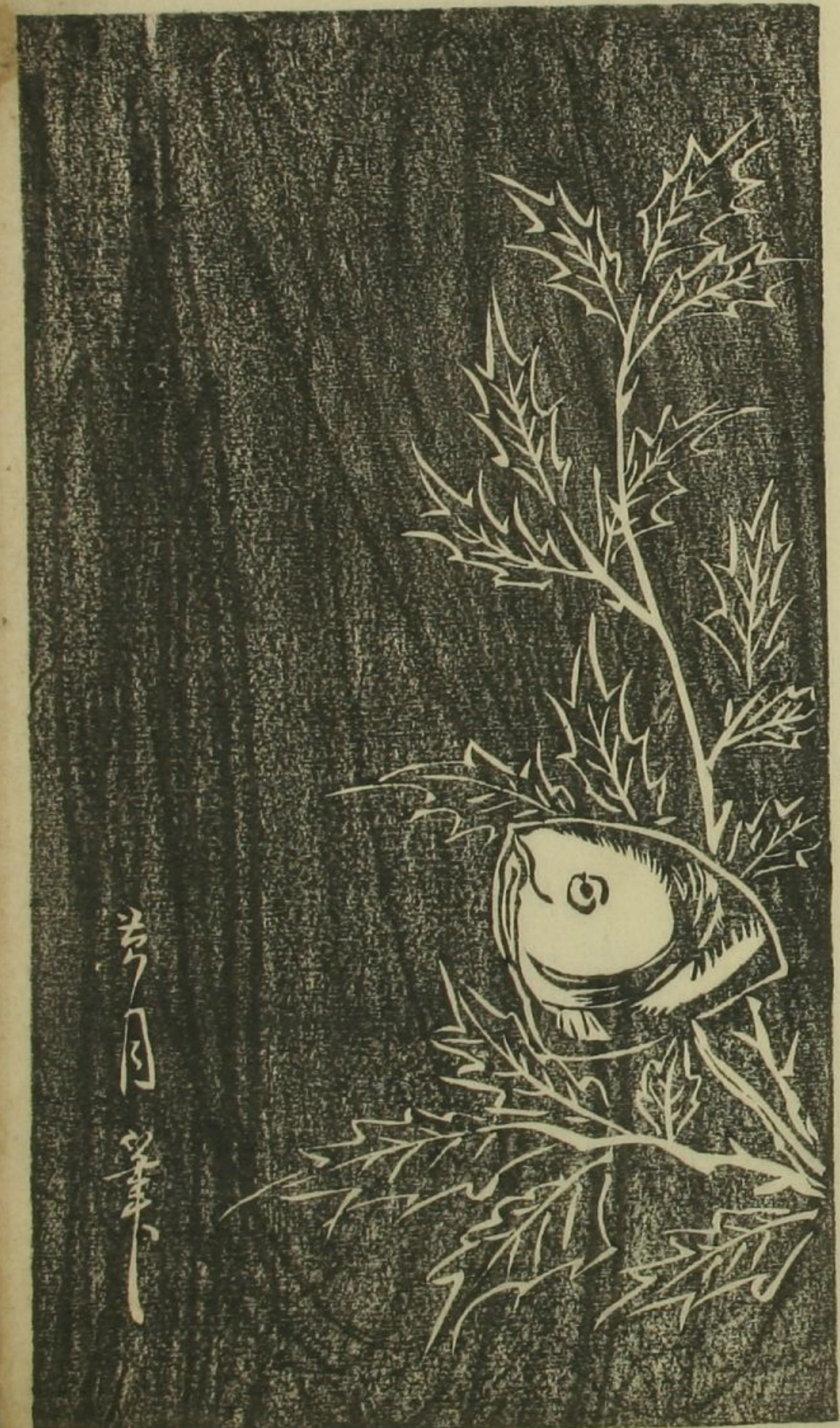
○ 思〜〜も不招〜〜り園の梅 鏡山
〜〜〜〜〜去尻第の〜〜の 氷鏡
の〜〜〜〜〜め子〜〜成あ〜〜人 桃鏡

〇
 〆のまやまの湖の月日星
 氷梅
 南枝のめくま告る氷
 氷鏡
 川の口は流るやめく人
 菊旦

〇
 あけのまよとまの柳の
 氷鏡
 人も嘘も目とまの流
 氷鏡
 曲の宴へ柳の口かして
 氷谷

〇
 むまのまよとまの柳の
 氷柱
 柳の葉のまの流る池
 氷鏡
 山姥の櫛をまのまのま
 氷室

〇
 まのまよとまの柳の
 寛治
 まのまよとまの柳の
 氷鏡
 茶の白免りまの雪とけて
 本徳



芳月筆

果考

漕うきりふくや年の實 水
 とくきり月代きり年の深 水
 六のきりさうあて清り年の果 水
 好まハきりさうきり吾や年の深 菜
 地きりさうきり年のおりり 水
 杉きりさうきり年のおりり 水
 日海波きりさうきり年のおりり 水
 松ハきりさうきり年のおりり 水
 雲の幕きりさうきり年の果 水
 不二ちりさうきり年のおりり 水
 梅ハきりさうきり年のおりり 水

大和千輝さり年の深 水
 依保娘も山さうきり年の深 水
 浦島さうきり年の果 水
 松亦ハ年の終り 水
 抱さうきりさうきり年の果 水
 きりさうきり年の果 水
 赤坂ハきりさうきり年の果 水
 あしりの果の果 水
 さうきりさうきり年の果 水
 友さうきりさうきり年の果 水
 中さうきりさうきり年の果 水
 赤下きりさうきり年の果 水

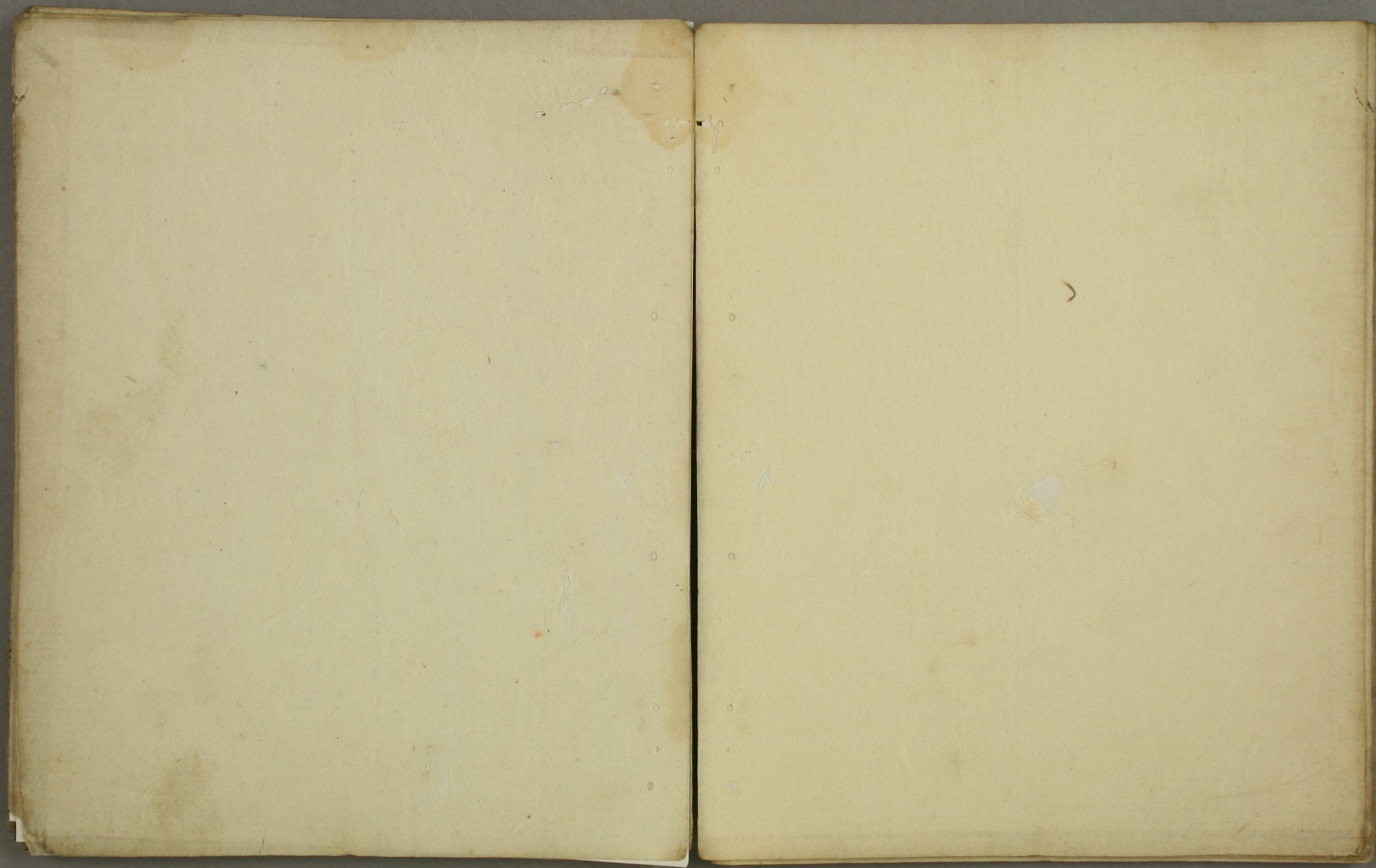
了付寶曆かのよの己集く月々の
 軍の南山人より多れた
 我賞のありくはありひと玉辰の
 くのふとのあそかきし 市
 本とけく句とけくありくく山海
 とうりくく 吹雪と後には福多
 美海ありりり

芭蕉みせ

俳四節氷鏡書



野上吉田魚川



花は... 秋の月... 白を... かり... 句を...

白の... 秋... 完美

秋... 置

柳...

秋... 彦

秋... 輝

人... 仙

秋... 白

秋... 美

抱き寄りて東海をゆくは情動しく 未白

我れをむくいと流るる位 和泉

古今に存じきまはしるる位 柳屋

しーしーの月を眺むる 文魚

龍宮のふたへ海を 秋の風 美富

一列をすりと出し 雲取 徳布

寝ぬ寝ぬ地をのりて 鶴の足 魚洲

あきらみ海を渡る 柳の灯 与精

福となく鳥のうらみ 花のまき 小倉

尾をたれぬあて 田作の思 雄雄

家の月もあやふさふさ かもや 百我

うらの連音の音を 味く 芳尾

ほろほろと一戸をくくし 出さず 玄菟

きぬきぬしのしるきもあはれ 雲帆

老るる茶のまじり 杖の意 玩音

まじり肩ののりぬのいけ 病亭

貝のいの貝の 相毒 妙法 山

ついでに 次 杖 寸 杖

四五のあつと 杖の 杖

用を 杖 杖

ついでに 杖の 杖

杖の 杖 杖

杖の 杖 杖

杖の 杖 杖

申渡す 杖の 杖

杖の 杖 杖

杖の 杖 杖

杖の 杖 杖

杖の 杖 杖

杖の 杖

梅の香きしじぬ成り 輝也
 住屋
 林の
 新十
 文石

山吹のこころ 輝也
 花
 花

一斗の 輝也
 實者
 仙也
 申之

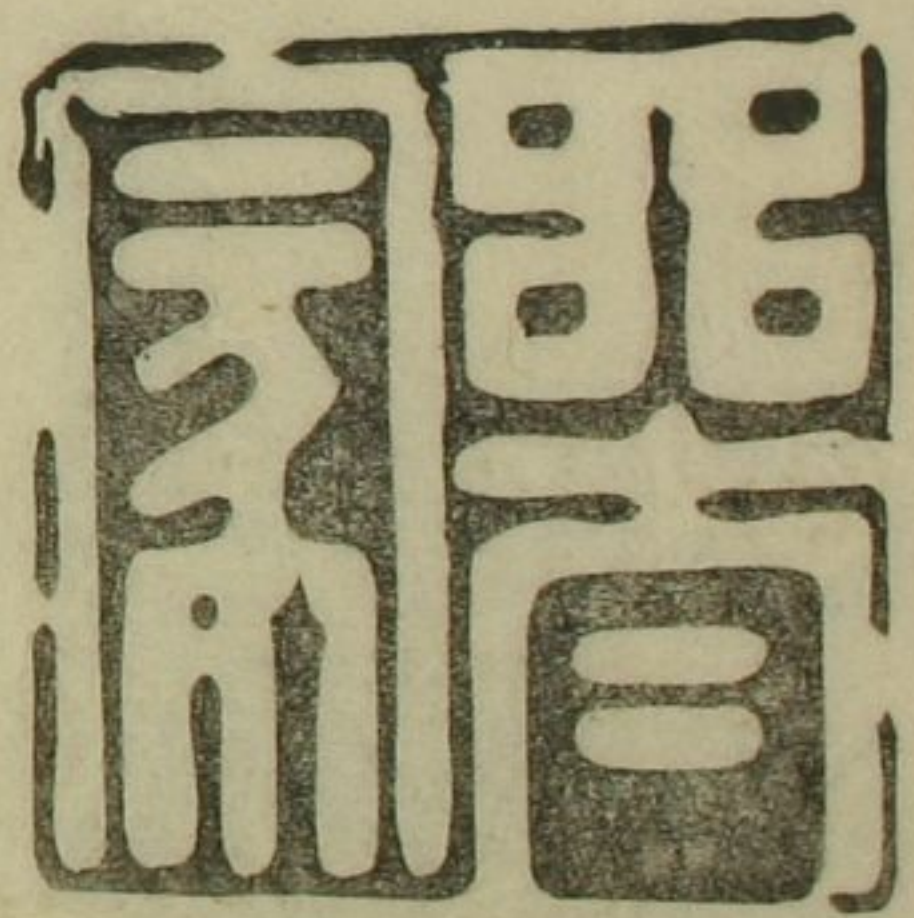
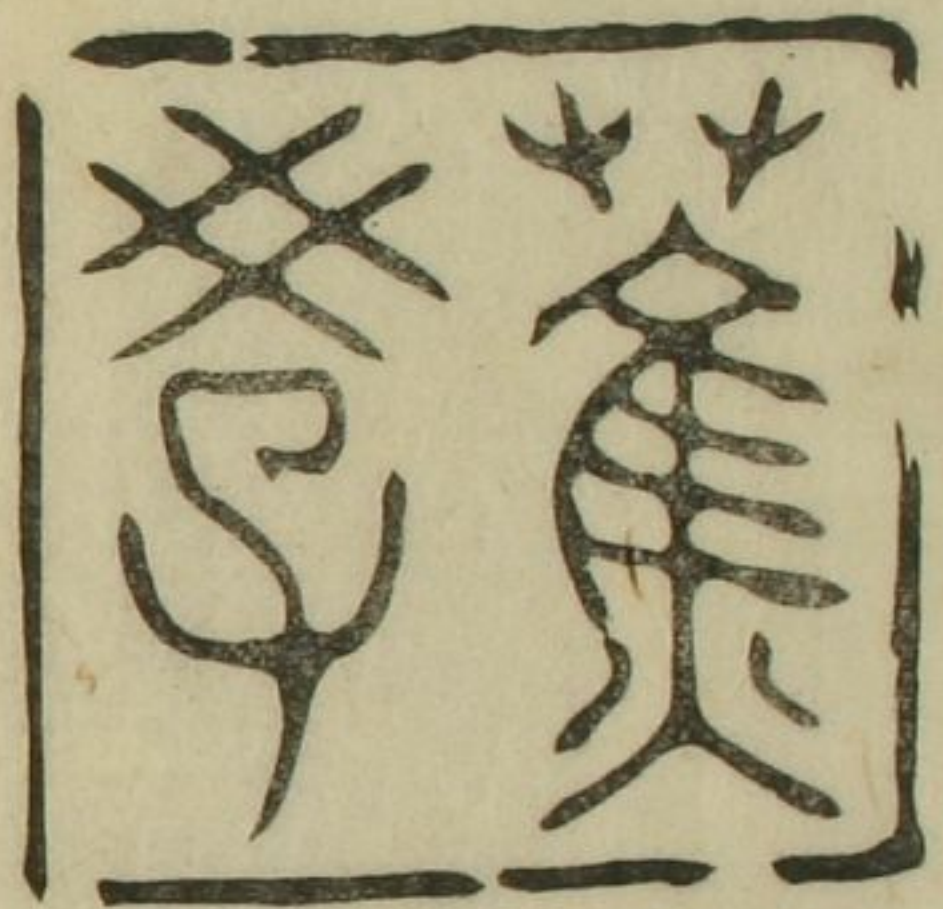
人のものたるはくもさの御が寛之
系9少なるはくもさの御が寛之
水かしく少く清きなるはくも
くさく世つともさの御が寛之
酒の御が寛之

十二月九日 寛政九年十二月

の命くはくもさの御が寛之
智が良也
完美

歳日一

寛政九丁巳春 かくら庵熟中



寛政九丁己春

試筆

其の門下の諸例を時代ごとの流弊に
おこしつゝ松上梅の如き古来より
海にふる累の不易ありて我々も
又その中よりふるふる可なりと

かたし

翁歳や故てまゝ

鼓らそ

歩半

善島

砥うらむ結日比や梅北印と在祈

勢あ

可なり

景野連中

半の春の能たらしむ梅柳 祇東

鳥鳴れれば無きもあはれしうきと
春こそかくはるも秘しと

遠き葉やこぼし種後の親を州 來賀

も何窮ふ皆若やさぬ家の去 結楚

福も〜や秋に到るる凡能言 花渡

あの方う〜あ〜今もや福来る 天々

けの空や雲に隔つる國も形〜 文笠

初〜か〜松ふけ〜入る〜日哉 一菊

光陰の去らもあ〜た〜あ〜あ〜け〜見 得泉

ち〜の〜や〜花の〜ゆ〜う〜あ〜あ〜あ〜 夜白

門松や中よ〜あ〜あ〜日〜二見浮 為夕

あ〜て〜あ〜こ〜種〜の〜あ〜あ〜あ〜あ〜出 昆羽

あ〜あ〜初〜の〜ト〜か〜こ〜し〜〜〜〜 松浦

種〜く〜の〜あ〜や〜あ〜あ〜あ〜あ〜松〜あ〜あ〜 花田

人〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜 法入

和

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜 祇東

七里も一廻板や芽やうのふ
 来賢
 見ふや梅もも媚の如く
 後世
 指す指ははるも横川も龍のふ
 本溪
 一寸の針ももも心はまは風
 文道
 さし波の音もはるも屋ももも
 一閑
 美くもももももももももも
 竹流
 妻ももももももももももも
 鳥夕
 意同くもももももももももも
 花朝
 美神やもももももももももも
 夜心

公身やもももももももももも
 松清
 美れりや公繁もももももももも
 花田
 切凡中もももももももももも
 後人
 猿幸の猿もももももももももも
 素柳
 青帝
 四谷連中
 此は、綿織のま功をゆへ
 小雲やもももももももももも
 文琴
 凍もももももももももももも
 清風
 まももももももももももももも
 危言
 松竹の申もももももももももも
 危友

若菜や庭も梅は冬も初 縁来

神凡の雲は流るゝ夜来くまらして 寺車

枕小燈一思へせしる月日は 松色

先梅はむらしてるるお四月孫 路外

春月の花は軒端のほろ色傍 ^女 善哉

春景

まゝの羽子の下弦やまの流るる梅 文結

千の河もく風は春りり梅海苔 縁来

ぬく声は種をゆくやまら梅角 危言

引雲と角弁はくも梅は恋 縁来

切梯は朽片ををぬく柳うか 中流の月影を三つ 寺車

扇の雲のねれ小ドもやたも月 松色

縁ぬもも白くや梅の下流は 路外

柳くくもも春やも梅の雪 せいら

之始

赤坂書中

春風もく山も巖も月や弓けの 一歩

帯もくも梅も梅もくも梅のそ 吉雅

朝もくも梅も梅も梅も梅のそ 雨光

書せらるや久一あきの紙押へ 凡秀
明とくは門と鑿戸やと法のま 有隣
と門日うは顔合留とを隣へ隣 如也

温和

花柳を基と居りや春のあふ 一歩
喜阿香や核とわらふと法のと 吉報
月あふ一の梅とわらうお不月 有光
喜解や田つゝの終と境 伸 凡秀
不凡おく拂とて居る外山と 少儀

疎くや美草のなと舞拵の 如也

祝辰

平尾達中

たのく讀とあの本ふ歌也

讀

論語 太平記 新基經

神代卷 宝志傳 氏家方量記

神宮よいのちとくはとくは川の羽 西耕

元りやまの正成と梅のくら 文忠

門くち石田と鑿進ねた也 北里

送錦のちりも清く玉の春 如新

手玉とゆるる扇の子箱ふか 藤山

神代くちあくの竹やねるも 系貞

暖知

凍多や梅の白く其の如く
法多や富士の根の雪の如く
りしもよめてをさもよめて
あゝ雪のさく雪のさく
晴しけやむの如く
凡そよく知り高し如く

鶉見

赤城連中

鶉の如くも昔や今
梅の如くも昔や今
鶉の如くも昔や今
梅の如くも昔や今

かかゆく鶉もあくと朝の雲
松屋

吾奥

雪の如くも昔や今
梅の如くも昔や今
梅の如くも昔や今
梅の如くも昔や今

景目

春山下連中

梅の如くも昔や今

茶

弓

画

馬

大橋や家よるに名の秘い白 止致
新よもりに去るを柳をらりて 赤琴
菊もやよりの海に魚をくす 栄瀬
さけりよ水細工始や長果老 音友

吟風

解憐く春も翠月の白いりぬ 止致
はらりとと流るるとえ送る雨声ふ 赤琴
小梅の初〜一毎やよりの音 栄瀬
河舟里よ舟〜はるるも霞哉 音友

吾れよ琴ひけ〜春の柳うら 南村
木兔の玉さくけりや伝信所 随馬

三始 春鳥 加奈川之溪中

無一物〜吹いそる柳のやゆ柳也〜 赤琴

静さや世も一は〜小川の春
柳もよもに流るる録つく女此童

籠景 加列連中

猿亭や紅梅遠き里めく子 芦笙
そとあや改〜心水〜ぬるる 三鼓

杜若さくさくあさくさ老やさるまてく 巴柳
さくさくやあんのさくさ同さるま 地盤
さくさくよさくさくさくさくさくさくさく 多幸

□
歳 晚

類 壽幸子の 石江
札納 柳子海

さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく 止 級

家元と人よさくさくさくさくさくさく 永登
古れやさくさくさくさくさくさくさく 景順
さくさくさくさくさくさくさくさくさく 吾友

やのさくさくさくさくさくさくさくさくさく
のさくさく

牡丹のさくさくさくさくさくさくさくさく 来 賢
さくさくさくさくさくさくさくさくさく 志 遠
やのさくさくさくさくさくさくさくさく 遠 之
さくさくさくさくさくさくさくさくさく 乃 流

月夜は仕旦あそび年み奥 西
 よき月を逢候しりおらうのき 鳥夕
 此ころまゝ表の白らや年み市 鼠朝
 形くまはくも子身あや様のお 松浦
 正月の舞をさねく果えりも 花田
 以ぬり能庵のけりけり子の言 一菊
 松林の参りや中し保あ 詣 文を
 まはれしりお言あそび大毎日 後人
 川原古館あり 里の所を去 紙束

病もくまればぬ縁ややりの市 茶賞
 歌たりわいふをむとく一お城 如新
 ゆく通や大子唐りてあし世帯 如里
 餅くかや柳をよのきくまゆり 文思
 糸りんとむもあそびやうとせぬ 為耕
 新一年さうくとあそびやうはうち 香心

我々七鬼赤福や巨けり
信房まふおひをまふ
 子抱の勝たう呂ややうなる 素焼

六十一のまぢりうら

四十二の年も初く初北緯緯

加奈川三度
不掃名
後名三葉

願く也二方の里人少くのも

四應名

密くに持るも年のくく成也危

福くの密もくくく也市遠家

賑くれ新くやく一能友隣と 柳里

針仕馬小屠務の密也くく一年め也

年の尾やか一民の密も松の密く 多隣

唯はも此も出まくくくもく也凡也

初もつれ善も白もやくの初 為也

可く鐘の後や千もく除取の凡吉新

所子男子梅も笑も也子能奥 一末

もくく記美試かく母や信初也妻 又等

而揚も五親も坊もくく也此 結此

先も此也もと密の固見不也 危言

来も善のも此いも一葉竹賣 危友

達所の初も竹やくの浪 徐来

豊くあふ里と奉り奈と一の香
香車
松竹と遠ハるり中や一松門 松色
碧とのあふく松や深衣の妻 歌外
指吹凡小科多一解の花 香家

納會短歌行
雨夜

あふくあふ里と奉り奈と一の香
香車
松竹と遠ハるり中や一松門 松色
碧とのあふく松や深衣の妻 歌外
指吹凡小科多一解の花 香家

松竹と遠ハるり中や一松門 松色
碧とのあふく松や深衣の妻 歌外
指吹凡小科多一解の花 香家

松竹と遠ハるり中や一松門 松色
碧とのあふく松や深衣の妻 歌外
指吹凡小科多一解の花 香家

松竹と遠ハるり中や一松門 松色
碧とのあふく松や深衣の妻 歌外
指吹凡小科多一解の花 香家

松竹と遠ハるり中や一松門 松色
碧とのあふく松や深衣の妻 歌外
指吹凡小科多一解の花 香家

松竹と遠ハるり中や一松門 松色
碧とのあふく松や深衣の妻 歌外
指吹凡小科多一解の花 香家

藤の志をいふ所の歌

歌外

此の歌もそれか都の

吉歌

三

もも 歌は 以て 何と云ふ

凡考

まゝか 驚く 珠指に 仰る

危言

ちやうと 情けも 志の 全別

而克

藤 枝も 泉の ありの 葉 咲

縁来

玉も 少く 川の 傍に 涼う 分

危古

限 一も 海と けま 葉を 橋

凡考

葉 振柳 幾川 所 告て 云

之 際

三

藤 周も 今 夜も 静し 月 の 奇 昔 象

身 あり の 音 け ち ち ち 行 音 昔 牛

此 の 利 々 様 々 子 際 の 割 裂 錦 一 歩

好し 由 せ へ 志 あり 家 業 一 吉 袴

幸 しく 極 足 成 正 如 ち や 中 踏 外

ち ち 川 ち の ち ち ち ち ち ち 危 言

文 尾

